

笛吹川フルーツ公園の成立と変遷

植物園、ランドスケープ・アーキテクチャー、テーマパークとの比較から

Planning and History of the Fuefukigawa Fruit Park:
In Comparison with Botanical Gardens, Landscape Architecture and Theme Parks

平野 千枝子
HIRANO Chieko

笛吹川フルーツ公園の成立と変遷

植物園、ランドスケープ・アーキテクチャー、テーマパークとの比較から

Planning and History of the Fuefukigawa Fruit Park:
In Comparison with Botanical Gardens, Landscape Architecture and Theme Parks

平野 千枝子
HIRANO Chieko

キーワード：植物園、庭園、建築

要旨：山梨県笛吹川フルーツ公園は、1995年に開園した山梨県山梨市に所在する公園である。本稿では、この公園とその中核施設であるフルーツミュージアムの設立時の構想を、資料によって確認する。次に開園時からの変化のうち、主要な2点を指摘する。その上で、庭園から独立して成立した植物園、庭園の拡張としてのランドスケープ・アーキテクチャーの歴史の検討を通じて、笛吹川フルーツ公園がもっていた設立の理念のグローバル性と地域性を再評価する。最後に、笛吹川フルーツ公園は「フルーツをテーマとしたテーマパーク」として構想されたが、自然を表象として扱うテーマパークとは区別すべきであることを指摘する。

はじめに

山梨県笛吹川フルーツ公園は、山梨県によって整備され1995年に開園した都市計画法に基づく都市公園である。本稿ではまず、その設立時の構想と建築の特徴を、笛吹川フルーツ公園の基本設計(1990年)、フルーツミュージアムの基本計画(1991年)、基本設計(1992年)等から確認する。次に開園以降の変遷を辿り、当初の構想からの変化を指摘する。変化のひとつは2013年のトロピカル温室の廃止であり、もうひとつは隣接する民活整備区域の開発である。山梨県笛吹川フルーツ公園(以下適宜、フルーツ公園と略)は、出発点に画期的な構想を持ち、建築もその構想を踏まえて設計された。しかしそのことは、25年以上の時を経て忘れられてしまっているのではないだろうか。本稿は、フルーツ公園及びその施設であるフルーツミュージアムを、「植物園」「ランドスケープ・アーキテクチャー」「テーマパーク」という空間の歴史と交差させることで、当初の構想の再評価を試みる。

1. 笛吹川フルーツ公園の成立

(1) 笛吹川フルーツ公園の計画

笛吹川フルーツ公園は、「フルーツをテーマとしたテーマパーク」として構想された。1985年、山梨県総合福祉計画第3次計画のなかで「山梨県大規模公園整備基本構想」が策定され、東山梨地域に「E. F. Wパーク(花とフルーツとワインの公園)」を設置することが提案された。3年後の1988年、都市と農村の交流拠点として「笛吹川フルーツパーク」の基本計画が作成される。建設地は、ほかに牧丘、勝沼、一宮も立候補したが、1989年、山梨市江曾原の丘陵地に決定した。この予定地は主にブドウ畑とアカマツ林で、周囲も山林、果樹園、桑畑であった。

笛吹川フルーツ公園の目的は、以下の5つとされた。(1) 果樹農業の振興、(2) 都市と農村の交流の場、(3) 総合リゾートカントリー整備区域の拠点、(4) 地域住民の余暇活動の拠点、(5) 魅

力ある空間の創出。山梨県による1990年の『(仮称) 笛吹川フルーツ公園基本設計報告書』には、すでに現在の公園に設けられているバインカスケード（ブドウ蔓状の滝・水路）、アクアアスレチック、フルーツアドベンチャー（散策コース）、野外ステージ、花の広場、フルーツミュージアムなどが示されている。(図1)

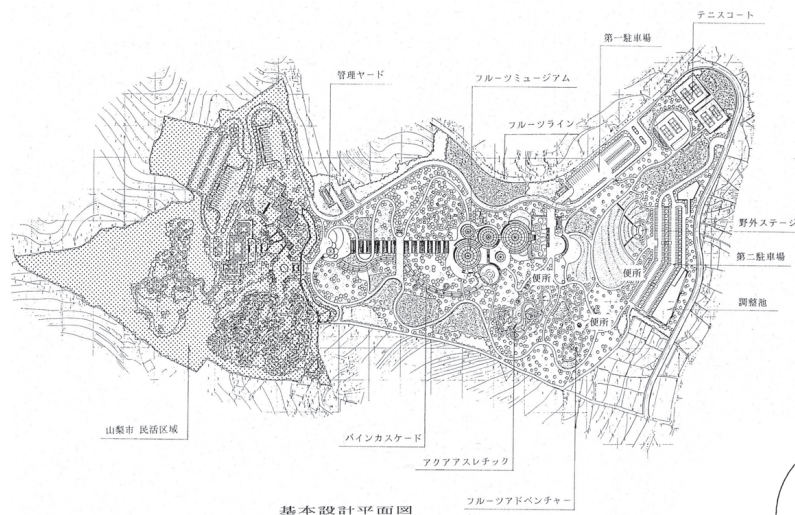


図1 笛吹川フルーツ公園計画図、1990年

フルーツをテーマとしたテーマパークという計画から、従来の都市公園の施設だけでなくメッセージ性をもった展示運営の要素が加味された。展示計画は、①フルーツ主体（果実、植物、栽培・農業）、②フルーツをとりまく背景（歴史・文化）、③フルーツによってもたらされるもの（食文化・栄養、産業・加工品）に区分され、さらに細分化された。(図2)

そこで、野外の施設に加えて展示の中心とされたのが、フルーツミュージアムである。山梨県による1991年3月の『県単都市公園建設設計委託 笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム 展示運営基本計画 報告書』は、フルーツミュージアムの基本理念について以下のように記している。

生命・食物・農業・自然生態系・地球環境といった、今日のそして明日の地球人類の直面する最も重大な問題を考える上での原点となる体験と知識をこのフルーツミュージアムで得ることができよう。(中略)フルーツミュージアムはくだものを誰でもが好きな身近な食べ物として中心に置きながら、その歴史、育種、栽培、産業、植物学などの生産の基礎にふれるとともに、加工、料理など生活文化、芸術文化にも亘る広い視野から、くだものと人間の深いかわりを扱った世界でも独特な内容を備えた施設とする¹。[中略は引用者による。以下同じ。]

展示運営の中核となるフルーツミュージアムが、フルーツをテーマとして植物学のみならず料理や芸術を含む文化を視野に入れ、生態系や地球環境の問題に結びつく独特の理念を掲げていたことがわかる。

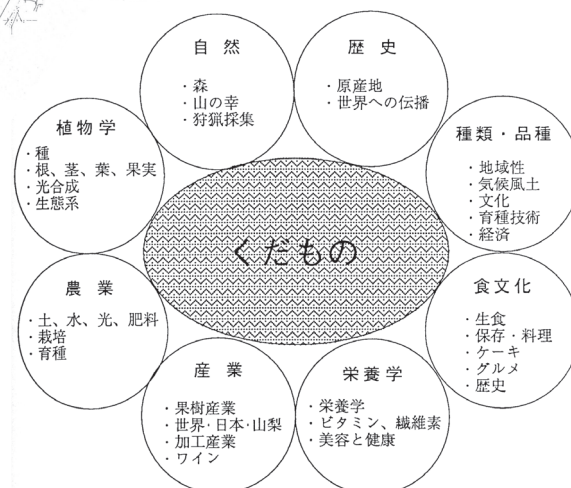


図2 フルーツミュージアムの概要、1991年

(2) フルーツミュージアムのプログラム

上記の『フルーツミュージアム展示運営基本計画報告書』(1991年)は、基本理念を踏まえた施設・設備・展示計画も示している。施設は、「くだもの村」「くだもの百科パビリオン」「オーチャード植物園」「フルーツ工房」「フルーツパーラー」である。以下に、この基本計画における施設の内容を見ていく。

「くだもの村」は全天候型の児童公園であり、円型ドームが想定され、猛暑・極寒の時期にも利用できる施設とされている。ドームは開閉式で、イメージスケッチには遊具や砂場、池や滝が描かれている。(図3)

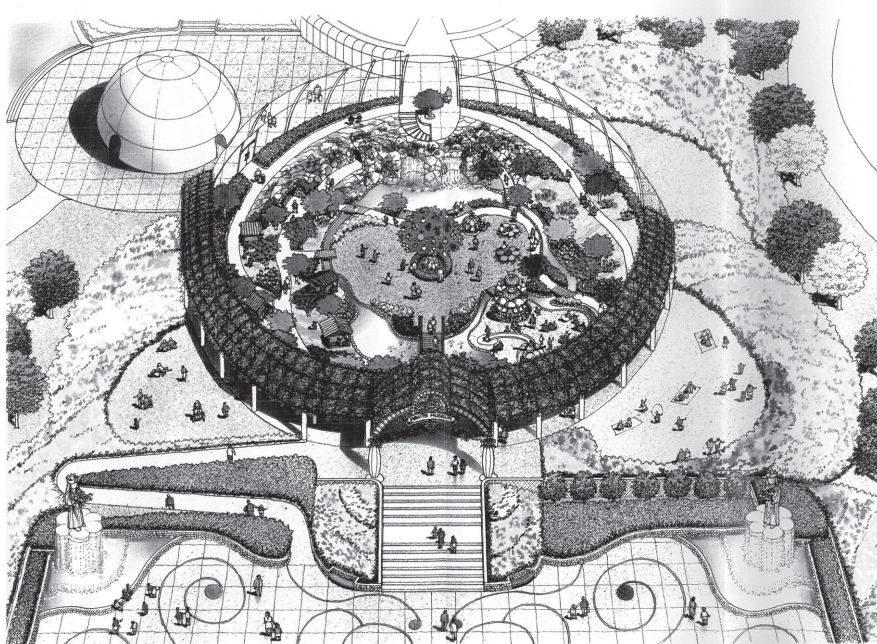


図3 「くだもの村」鳥瞰図 山梨県による基本計画報告書(1991年)

「くだもの百科パビリオン」(展示館)は、くだものを人類史的な時間と世界の広がりの中で捉える文化史博物館である。展示内容として、ブドウの歴史、りんご・柑橘類・メロン・バナナの原種や栽培地、日本のくだもの産地、山梨のくだもの栽培、食文化、ワイン、産業、植物学、栄養学、散種の特徴が挙げられている。

「オーチャード植物園」は生きた果樹の展示園であり、ガラス温室、半屋外の「花と実のテラス」、野外の果樹見本園、園芸ハウスからなるという。

「フルーツ工房」は、フルーツミュージアムの中核施設であり、小ホールに料理教室の機能を備えたカルチャーセンターである。他にギャラリーと物販のアーケードがある。

「フルーツパーラー」は、くだものケーキ、ジュース、熱帯のくだものを味わうことができるレストランである。

1年後の1992年3月に『県単都市公園建設設計委託 笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム基本設計報告書』が提出された。この設計書は3編からなり具体的な展示物や植栽リストを含む詳細なものだが、山梨県と株式会社森緑地設計事務所の連名となっており、制作の主体が見えづらい。だが、専門家の意見を聴取するフルーツミュージアム計画懇談会の記録では、森緑地設計事務所所長の藤内誠一が「フルーツミュージアム計画の経緯概要」を述べ、次に長谷川逸子・建築設計工房の長谷川逸子が「建築のコンセプト」を、そして学術企画代表取締役の須之部淑男が「フルーツミュージア

ムの考え方」として、「楽しいくだもの博物館、食べてわかる博物館」「人類史的、地球時代的な展示」「イベントなど運営型の施設」について説明している²。そのため、ランドスケープを専門とするコンサルタントの森緑地設計事務所が造園・植栽等、須之部淑男の学術企画が基本構想を担当したと考えられる。

須之部淑男は東京大学理学部植物学科を卒業し、NHK科学産業班チーフディレクターを務め、岩波書店・算数と理科の本シリーズ『ダイコンをそだてる』（1979年）や、『朝顔のせいぐらべ』（1981年）などの科学絵本の作者としても知られている。すでに1972年、日本教育学会において環境教育の必要性を論じており、1970年代に台頭したエコロジー論がその活動の基盤にあったことが窺われる³。独立後も、情報機器を使った展示方法の開発や環境教育などの分野で活動した。長谷川逸子は、『『フルーツ・ミュージアム』では、はじめの構想をつくった学術企画の須之部氏の企画内容がよくて設計に参加した⁴』と述べているから、フルーツミュージアムの特徴だった人類史を視野に収めた地球規模の理念は、特に須之部によってもたらされたものだと推測できる。

（3）フルーツミュージアムの建築

山梨県は1991年に建築家の長谷川逸子にヒアリングを行って、フルーツミュージアムの建築設計を依頼した。須之部淑男や森緑地設計事務所による作業を踏まえ、1992年3月から10月に基本計画、その後93年3月まで基本設計が行われた。長谷川逸子・建築計画工房はフルーツミュージアムの基本構想を発展させ、人類学者等、特に女性たちとの議論を重ねて新たな建築のコンセプトを作り上げた。そのため、すでに述べたように野外施設が最初の計画に基づく一方、建築は県の基本計画に現れる図や模型とは大きく異なるものになった。1993年4月から94年に実施設計がなされ、1994年から工事監理に入った。

長谷川による建築は、各施設に（2）で述べたような機能を持たせつつ、ブリッジでつなげた連立する3つのドームの形態と、地下空間の存在が特徴的である。

「くだもの広場」（1991年の基本計画では「くだもの村」）は、各種のイベントを行いカフェテリアもあるインドアパークである。ここにある「池で囲まれた水のステージ」は、現在では水が張られていないが、基本計画（1991年）を踏まえたものであったことがわかる。建築としては、「柳のような樹状のフレームを持ち、天井全体を可動ルーバーの日除けで覆い、木陰をつくる大きな木のイメージを与えている。⁵」（図4、5）この

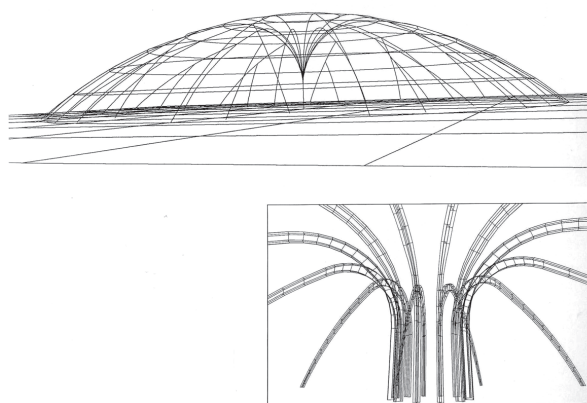


図4 「くだもの広場」



図5 「くだもの広場」内部、完成後

ドームは地面に広く接し、飛来した円盤のようにも見える。

1991年の山梨県の基本計画の、「くだもの百科パビリオン」と、「オーチャード植物園」のガラス温室は、ガラス温室と地下展示室からなる博物館、「くだもの百科」「くだもの館」として設計された。熱帯果樹を観賞するトロピカル温室は、クールハウスと上部から観察できるテラスを備えていた。温室には種子をイメージした形態が与えられ（図6）、地下展示室は用途に柔軟に対応できる矩形の空間である。「対比的な空間を縦の動線ダイレクトに結ぶことにより、来訪者の知的関心を刺激すると同時に移動そのものを一種のアトラクションとするよう考えた⁶」という。（図7）地下の展示空間は、トロピカル温室と「くだもの広場」を繋げており、地中の別世界に降りていく体験や、地上では独立したドームが密かに繋がっている驚きが生まれる。なお、「オーチャード植物園」の野外果樹見本園も予定通り作られ、現存している。

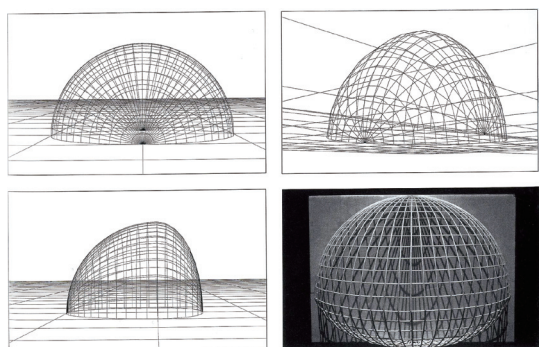


図6 「くだもの百科」トロピカル温室

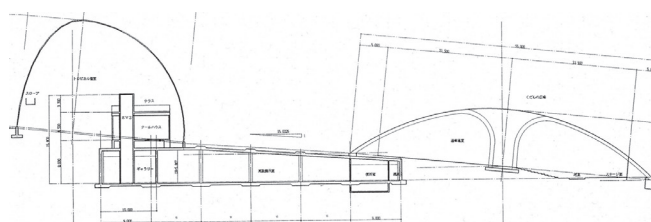


図7 「くだもの百科」のトロピカル温室「くだもの館」「くだもの広場」断面図。

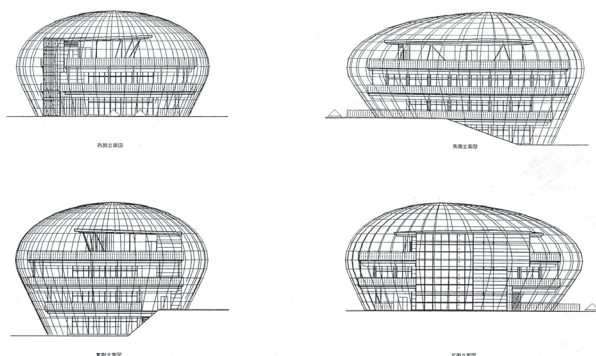


図8 「くだもの工房」東西南北の立面図



図9 「くだもの工房」フルーツパーラーのバルコニー、完成後

3つ目のドームは、基本計画における「フルーツ工房」と「フルーツパーラー」を含んだ「くだもの工房」で、地下に管理運営事務所を置く。「フルーツ工房」に想定されていたカルチャーセンターの機能として、1階に展示・販売施設、2階にワークショップとクッキング教室、図書室があり、最上階がテラスから風景を望むことのできるフルーツパーラーである。ドームと記したが、「つる性の果樹を仕立てるための楕円形のパーゴラ（植物のシェルター）の中に、シースルーな矩形のビルディングをおさめた入れ子の建築になっている。ビルディングの周囲には各階に広いバルコニーをとっている。⁷」（図8、9）

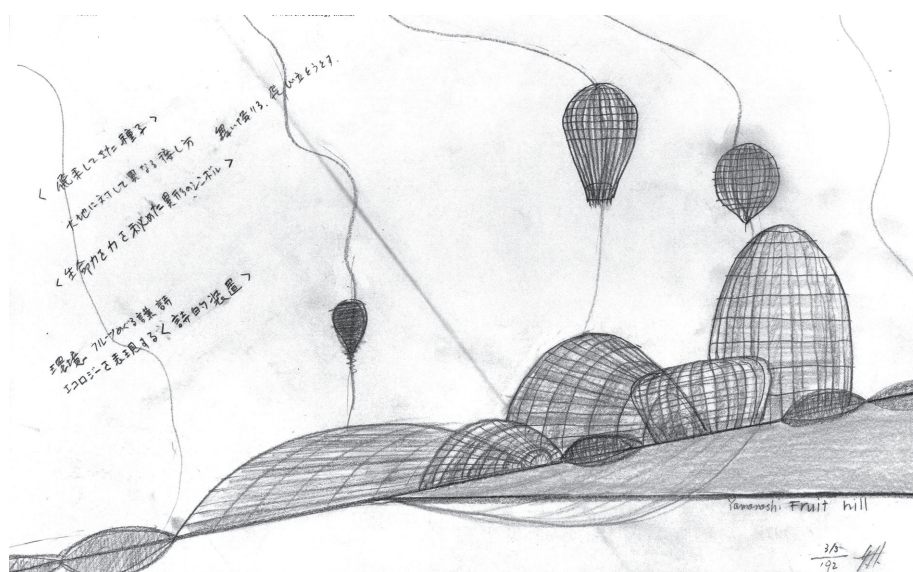


図10 長谷川逸子 山梨フルーツミュージアム ドローイング、1992年

それぞれの建築は、種をふやしていくフルーツの生命力の多様な存在様態を表現している。「くだもの広場」は大きな木のイメージ、「くだもの百科」のトロピカル温室は生まれ故郷の熱帯の太陽に憧れ、芽を出そうと上にのびあがる種子のイメージ、地下展示室「くだもの館」は貯蔵されたフルーツの遺伝子の世界、「くだもの工房」は生命力に秘められた異形性が、不規則に膨らんだフレームの形によって表現されている。それぞれの大地との接し方は親密、あるいは反発するという違いがあり、たった今舞い降りて来たばかりのように、あるいは今まさに飛び立とうとするように動的に表されている。こうした発想は、構想初期のものと思われるドローイング（図10）に、表れている。

従来、植物園における温室は小宇宙を表すドームを用いることが多い。国内にも、多面体ドーム（豊田鞍ヶ池植物園大温室）、クーポラを戴く古典主義的なドーム（北里バイオガーデンのコンサヴァトリー）、長方形平面と組み合わされた四半球の連続ドーム（東京都夢の島熱帯植物園）などの温室が見られる⁸。これに対してフルーツミュージアムは、温室だけではなく多様な用途に応じて、コンピュータによる作図を用いながらユニークなドーム状建築の組み合わせとなっており、とりわけ夜、山の中腹に浮かび上がるその姿は多くの人にSF的な幻想を喚起することになった。（図11, 12）『設計主旨説明書』の「設計要旨・設計概念」で、長谷川は以下のように述べる。

フルーツと人類とのかかわりの中で、豊かな生活文化が創造され定着していったことは、飛んで来た種子が風土への定着をすることと対応しているにとらえることもできる。フルーツの伝播、フルーツをめぐる生活文化のあり方には、地域性と国際性の見事な共存、動物という異なる存在との共生、多様性など、現代文明への最良の提案がみられるように思われる。

フルーツと人類文化史のかかわりは常に美的価値をとめない、時に宗教上の意味を持ってきた。そしてフルーツをめぐる博物館を考える時、今日われわれが臨んでいる地球規模のエコロジーとは、物理的な環境とともに、感性、知性、欲望と言った精神領域を同時にふくんでいることを思い起こさせられる。

こうしたフルーツをめぐる思想を表現する施設内容にふさわしく、この建築はそれ自体がフルーツをめぐる思想を表現しようとしている。環境のエコロジーをつくりだす機械的装置であると同時に、精神や社会のエコロジーを表現する詩的装置としての建築をめざしたいと考える⁹。

生命・食物・農業・自然生態系・地球環境といった現代の課題の原点となる体験をもたらし、くだもの人間の深いかわりを扱う施設というフルーツミュージアムの新しいプログラムから、シェルター群が詩的装置として斜面に連立する「新しい時代の集落」という、これまでにない建築が生み出されたことがわかる。

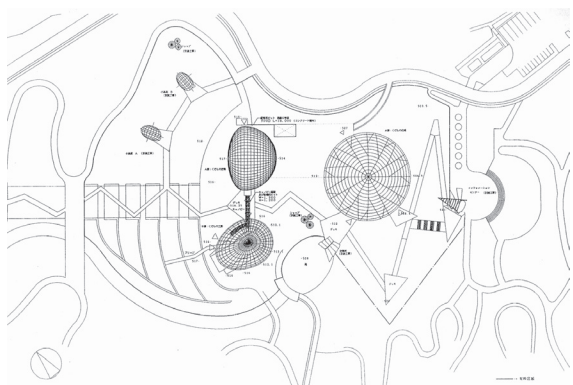


図11 フルーツミュージアム配置図、1992年



図12 フルーツミュージアム、完成後

2. 笛吹川フルーツ公園の変遷をめぐる考察

画期的な構想からスタートし、それが建築によって解釈され表現された笛吹川フルーツ公園は、1995年にオープンした。公園への入園はいつでも自由で、ミュージアムへの入場は午前9時から午後9時、トロピカル温室と「くだもの館」は午後5時まで、月曜休館の有料施設となった（高校生以上が400円、小中学生200円。）来園者は3ヶ月余りで10万人を超え、2年半足らずで50万人に達した。2000年に山梨日日新聞社・山梨放送が主催した、21世紀に残したい県内の名所などを選ぶ「ときめく21世紀ー山梨100選」では、フルーツ公園が最多の3万2千75票を獲得した。最近でも、山梨を舞台にした漫画・アニメ・ドラマ『ゆるキャン△』の原作者が、「笛吹川フルーツ公園が好きで、明け方に原稿を描き終えた時は、よくバイクで景色を見に行きます¹⁰」と述べるなど、多くの人に親しまれている。毎年さくらんぼ、桃、ブドウなどの収穫の時期には、クッキング教室のみならず、さまざまなイベントが開かれ、農業団体や市民団体の活動の場ともなってきた。美しく整備された芝生の広場に多くの人が寛ぎ、夏季は子どもたちがアクアストレッチを楽しんでいる。県民に親しまれ、また観光スポットとして県外からの来訪者も多い笛吹川フルーツ公園であるが、現状は当初の構想と異なっている点も多い。無論、バブル経済の時代の壮大な計画を、長期の景気後退や少子化を経た現在、そのまま維持することは困難である。広大な公園の植物を維持管理するだけでも、多大な労力と多額の税金が投入されていることは想像に難くない。しかし以下では、フルーツ公園の開園以後の変遷と建設時の構想の矛盾に問題を絞って、この公園の可能性を再検討したい。その際、フルーツミュージアムと植物園の比較、庭園の歴史におけるフルーツ公園、フルーツをテーマとしたテーマパークの意味を考えてみることにする。さらに、主に山梨市在住の方々にフルーツ公園およびフルーツミュージアムについて質問し、さまざまな受け止めを参考にした¹¹。

2-1. トロピカル温室を巡って 植物園との比較から

(1) 植物の移動と植物園

フルーツミュージアム基本計画の「くだもの百科」という百科事典のコンセプトは、トロピカル温室と地下の「くだもの館」の展示（および野外のオーチャード）に実現したことをみてきた。この施設が植物園と共通するのは、世界の植物を栽培・展示することであり、異なるのは教育施設としての

恒常的運営がなされなかったこと、植物学だけを基盤としてはいないことである。

植物園は多様な植物を栽培・展示するところである。このことは当たり前のようであるが、植物が移動可能であることが前提となっている。植物は動物と異なって地面に定着して動かないという常識に対して、川島昭夫は以下のように述べる。

植物が移動しないとするのは、じつは誤りである。むしろ植物の生態は、移動することを目的としているとさえ言える。植物の個体は大地に束縛されているが、個体間の世代の交代を利用して植物は移動するのである。種子植物は世代交代にあたって、生殖質を種子のなかに保存する。種子は、一般に軽いか、固いか、数多いかのいずれかであり、また環境への耐性がきわめて強い。こうして一種の嚴重なカプセルにくるまれた植物は、自ら弾けとび、あるいは風の力を利用したり、鳥や動物に食べられることによって親の世代が生きた場所から遠ざかろうとするのである。そのことで植物は群落の範囲を広げると同時に、種として環境それ自体の変化に対応することが可能になる¹²。

植物は持ち運び可能だからこそ、人間が資源として管理することもできた。こうした植物の移動の最大のもは新大陸の発見によっておこった。古代の植物学を基盤としていたヨーロッパの人々は、16世紀以降、ギリシャやローマの人々が知ることのなかったアメリカ大陸やアジア諸国に由来する産品に出会い、観察、考察するようになった。1543年、遅くとも1544年ごろには西欧世界初の植物園がピサ大学の付属施設として開園し、その後イタリア各地に、さらにはアルプス以北の大学都市に作られていった¹³。16世紀イタリアの植物園は研究施設としての機能を帯びていたが、概して「市民の静謐な憩いの場として機能しており、学究たちが清談に花咲かせる空間でもあった¹⁴」という。植物園には次第に花壇、標本のギャラリー、図書館、博物図譜のアトリエなどが整備されていった。

イギリスでも、王侯貴族の庭園の一角に、限られたイギリス原種の植物を補う新しい植物が世界各地からもたらされ、植物園として独立していった。薬効植物を研究する薬草園に加えて、18世紀になると折からの庭園ブームによって園芸種の繁殖が盛んになる。リンネの分類法による植物の同定は、世界中の植物を市場に流通させるのにも役立った¹⁵。園芸の審美的、社交的な役割に加えて、川島が上記の引用に続いて述べていたのは、帝国主義における植物園の役割である。アメリカ大陸からカカオ、ジャガイモ、とうもろこし、タバコなどが導入され、逆にアメリカで小麦などの穀物が栽培されたり、安価な労働力を動員できる土地でプランテーションが運営されるようになった。しかしもちろん植物は、地球上どここの気候や土壌でも育成可能というわけではない。そのため植物園の役割のひとつは、植物の栽培について研究する実験的な農園となった。いずれにしても植物園は、その土地に自生する植物の研究のみならず、そこにはなかった植物の移動を原理としている点で、各地の文物もとの場所からひき離して収集・保存しようとするミュージアムに連なっていた¹⁶。

現代の植物園は、研究施設、大学附属施設、都市公園に分類することができる。研究施設における植物学の研究は食糧、薬用、園芸用及び、遺伝子資源としての植物を研究して系統を保存している¹⁷。こうした研究は食品産業や各種製造業と結びついている点で、植民地植物園の機能を部分的にひき継いでいるといえる。都市公園としての植物園は、近代的ミュージアムの役割である社会教育を担い、来場者に対して基礎知識を提供し、生物多様性や環境保全に意識を喚起している。その活動の基盤として、栽培のための基礎調査や栽培法の研究が行われる。もちろん都市公園としての植物園の機能は、社会教育だけではない。わたしたちが植物園を訪れるのは、珍しい植物を見て楽しみ、都市の喧騒を離れた別世界で癒しを得るためでもある。

フルーツミュージアムは地球規模の多様な植物に目を向け、その風土への定着のプロセスを示そう

としていた。しかし植物園とは異なり、教育施設として体系的な運営はなされなかった。さらに植物園が植物学を基盤とするならば、フルーツミュージアムにはより広い機能が考えられていた。

植物の移動は建築のデザインによって表現されたように、フルーツミュージアムの基本的な思想だった。「くだもの館」の展示室の冒頭にはくだもの原産地を示す世界地図が飾られ、氷河期を経て生き残った数少ないブドウの種がヨーロッパ、アジア、アメリカで栽培されるようになった経緯がパネルで紹介されている。日本へは、大陸から渡り鳥の糞によって種が運ばれたという説が紹介されている。

フルーツミュージアムの基本計画には参考施設として国内の科学館と植物園が挙げられ、調査の対象となっていた。また、有識者による懇談会(1992年)では「博物館法に合うように、本格的なミュージアムにした方がよい」「学芸員を置いた本格的な『くだもの博物館』を目指したらどうか¹⁸⁾」との意見も出たが、実現に至らなかった。そのため、温室と展示室を備えてはいても社会教育施設としては位置づけられておらず、継続的な教育プログラムやそれを担う人材は不十分だったと考えられる。山梨市正徳寺にあった県の果樹試験場をフルーツ公園に隣接する敷地に移転させていることから、当初の構想には果樹振興に関する研究的な機能が複合されていたかもしれないが、ミュージアムとの結びつきが図られていたかは確認できなかった。

一方、フルーツミュージアムには植物園とは異なる新しい施設としての可能性があった。植物園が“botanical/botanic garden”として植物学を成立要件としているのに対して、フルーツミュージアムには、文化を含む領域横断的な構想があった。例えば「くだもの館」には、ブドウと文様、キリスト教とブドウの関わり、果物のモチーフに注目した絵画のレプリカ等の展示がある。また、くだものを五感で感じ、味わうというフルーツ公園全体のコンセプトは、むしろ教育施設の枠組みをとり払うものであった。甘美な果物は古くから感覚を刺激する欲望の対象であり、豊かな生産の象徴であり、特に乾燥した土地ではそのみずみずしさは貴重だった。果物のもつ官能性や享楽性は、特にトロピカル温室(図13)において体験されていたと思われる。笛吹川フルーツ公園とフルーツミュージアムでの体験についての筆者の質問に、山梨市出身の版画家、雨宮千鶴は以下のように答えている。

自動販売機でチケットを購入し、山梨での果樹栽培を中心に果物の歴史から今に至るまでを学び、そしてガラス張りのドームへ(現、わんぱくドーム)。その中で普段見慣れているバナナが木になっているではありませんか。パイナップルも。その他、見たことがない大きな葉をつけた木々に花や実がつき、ほのかに香りも漂い、この有様、空間に感動したものでした。植物が鬱蒼とし、湿気と熱気があり異国を感じさせてくれるかのようでした。遊歩道を進むと木々を上方からも観察ができ、トロピカルなアイスクリームもいただき、このドームにかなり長居をしました¹⁹⁾。

(2) トロピカル温室の廃止

しかし、このトロピカル温室は2010年に廃止が決定された。この年、国の「事業仕分け」を受け、予算編成の可視化を進める試みが県レベルでもスタートした。会議は山梨学院大法学部長の日高昭夫、

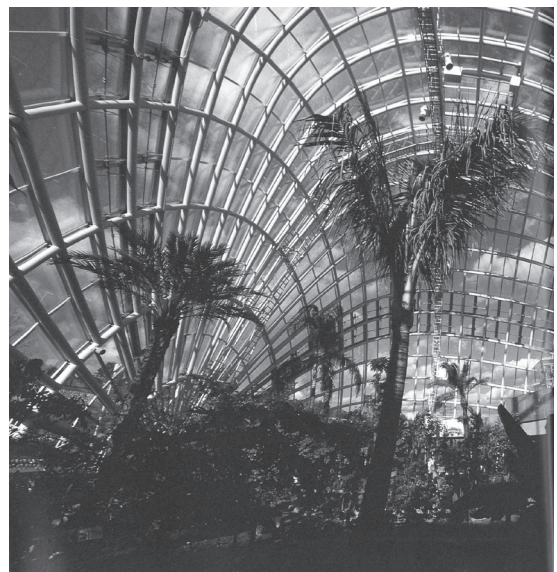


図13 「くだもの百科」トロピカル温室、完成後

元甲府市監査委員の土橋康二、公認会計士の田中佑幸の3氏で構成され、横内正明知事の基本方針「チャレンジ山梨行動計画」に盛り込まれた事業から、県民の関心の高さを基準に37事業を選んだ²⁰。笛吹川フルーツ公園については、有料施設（トロピカル温室、「くだもの館」）の施設利用者が減少傾向にあることを受け「利用者のニーズや満足度は高くない」と指摘して廃止を促した²¹。有料施設の入場者数は1996年の約20万人をピークに、年間5万人程度まで減少していたという。次いで11月、県による最終評価でも、「くだもの館」は「果樹に関する学習機会を提供する役割を果たしていない」と指摘され、トロピカル温室も「県の果樹振興との関連性は疑問」として、廃止が適当とした²²。

2013年4月、トロピカル温室は「わんぱくドーム」にリニューアルし、ドーム内には富士山をイメージしたネットを使った遊具や芝生広場が設置された。「くだもの館」は「果物の科学」など展示の一部を撤去し、イベントスペースとベビー休憩室を整備した²³。

当初インドア・パークとして想定されていた「くだもの広場」には実施においては遊具等の設置は行われなかったため、「わんぱくドーム」は現在、天候に左右されず子どもが遊べる施設として無料で利用されている。しかしこの変更により、南国の植物の種をイメージしたドームが持っていた意味は失われてしまった。なにより、トロピカル温室の廃止理由が「県の果樹振興との関連性は疑問」とされたことは、くだもの移動と生長、人間の文化や身体との関わりにまで目を向けようとした初発のコンセプトと乖離している。また、「くだもの館」の開館当時の展示技術と情報は2013年のリニューアルの際に更新されなかった上、撤去されたところは、イベントスペースとして何もない空間になった。これについて山梨市の農家に育ち、木の家具を製作している丸山博亮は、以下のように述べている。

展示内容については、私はあまり好きではありません。幅広くフルーツを扱うのか、地場産業である桃やブドウにフォーカスするのが曖昧で、とても中途半端に感じます。最近子どもとよく遊具を利用するために訪れるのですが、展示は勉強になるようなものでも無いですし観光客目線でも何が言いたいのが分からないので、あの空間になんの意味があるのかが理解できません。トロピカル温室があった頃は、ある程度展示がつながっていた感覚があったのですが、現状の展示室から屋内アスレチック場へ出る動線は、幼い子連れなら兎も角、その他の人にとって旧温室につながっていることは建築体験の強度を弱めているように感じます。若干桃／ブドウに寄せる展示ではなく、もっと振り切った展示をしても良いのではないかと、その上で展示室から地上へのつながりを少しでも作って欲しいと思います²⁴。

植物園は新たな世界の発見と植物の移動によって生まれた。そして産業との結びつきや園芸の審美性を原動力としながら、植物学の教育研究施設として確立されていった。フルーツミュージアムは、植物の移動という広い視野に立脚する点が植物園と共通していた。しかし、植物園のもつ教育的機能は十分に備えていなかった。一方で、フルーツミュージアムにあった文理融合のコンセプトや感覚性の重視は、植物園を超えた可能性を包含していたとも考えられる。施設の廃止には現実には維持管理の問題もあっただろうが、これによって成立時の理念はさらに忘れられたのではないだろうか。

2-2. 民活整備区域の開発 風景のなかの公園

(1) 民活整備区域の開発

トロピカル温室の廃止と並んで本稿で注目するフルーツ公園開園後の変遷は公園周辺の開発であるが、このことは実は当初から計画に織りこまれていた。もともと計画が、山梨県が運営する公共整備区域19.5ヘクタールの斜面の上に民活整備区域12.7ヘクタールを設定していたからである。民活

整備区域の基本構想策定調査は広域関東圏産業活性化センターが行い、山梨市を中心とした第三セクターによって整備されることになった。1994年7月の『山梨日日新聞』によると、山梨市が担当する民活区域の整備計画はバブル崩壊などの影響で手つかずの状態であり、ホテルやレストランなどは民間企業に土地を賃貸して建設する方法を検討していた。「これまでセゾングループ、日本鋼管、東武鉄道、三井建設、ダイエー、国際興業など十数社が現地視察したが、回答内容は芳しくない²⁵」と報じられている。

公園開園の翌年1996年、民活区域には山梨市が建設したフルーツセンターがオープンし、公園入口の駐車場とフルーツセンターを結ぶ長い坂道をロードトレインが運行を始めた。フルーツセンターは物産館（展示室、研修室、加工実習室、コミュニティルーム）、テント造りのファーマーズマーケット（農産物販売、ワイン新酒まつり、バーベキュー）からなり、第三セクターの山梨市フルーツパーク株式会社（社長は山梨市長）が運営した²⁶。翌1997年、民活区域に、南ヨーロッパの大農場主の館をイメージしたというフルーツパーク富士屋ホテル（国際興業グループ・山梨フルーツリゾート）が開業した。2002年にはフルーツセンターそばに日帰り温泉施設が作られた。この間、山梨市はこの区域に子どもたちのための自然体験施設の建設も計画していたが実現しなかった。

2006年、山梨県の都市公園である笛吹川フルーツ公園に指定管理者制度²⁷が導入され、従来運営にあっていた山梨県公園公社が管理者として選定された。しかし2009年3月、県公園公社は解散し、2009年4月から民活区域を運営する山梨市の第三セクターが公共区域も管理することになった。（その後2018年、管理者が変更された。）

以上のような民活区域整備の成り行きには、バブル崩壊後の地域にとって負債となりかねない計画との苦闘が伺われる。しかし、当初から民活区域と公共区域に一貫性は図られなかったし、さらに山梨県公園公社に代わって直接に地域経済と関わる山梨市が、公共性の高い公共区域を合わせて運営した。こうして観光拠点としての機能が重視されるようになったことも、一章で確認したフルーツミュージアムの構想が放棄されていった一因ではなかっただろうか。観光拠点としての民活区域と、フルーツ公園がもっていた公共的なテーマとの齟齬は、早くも1998年、以下のように指摘されていた。

ミュージアムは笛吹川フルーツ公園の中心施設であり、公共建築としての性格を有する。公園は公共整備区域と民活整備区域から成り、ミュージアムの建設以後は民活整備区域での開発が著しい。公園北端の民活整備区域では南欧風の民間ホテルが開業し、その横には物産館やファーマーズ・マーケットも設置されている。雁坂峠のトンネル開通により、週末には大勢の観光客がフルーツ公園にも訪れている。山梨の自然やフルーツ文化、暮らしを静かに包み込むはずの空間や景観の中に、商業主義的なアトラクションによる賑わいが持ち込まれようとしている。笛吹川フルーツ公園の開発はこれからも続くが、ミュージアムを中心とした建築物の公共性やテーマ設定の方向性が揺らぎつつある²⁸。

（2）庭園とランドスケープ

民活整備区域の開発については、フルーツミュージアムを設計した長谷川逸子も「その後、隣にホテルの設計をするようにとか、いろいろ頼まれたのですが、『あそこはぶどう畑だけの方がいいんです』と言って辞退したら、他の人が周りにいっぱいいろいろとつくった²⁹」と語っている。長谷川による1992年のフルーツミュージアム構想段階のドローイングには、「ランドスケープ」「アーキテクチャー」「一体化」の文字が見える。（図14, 15）しかし上の証言からも、周囲の環境との一体化を図るランドスケープ・アーキテクチャーという意図が、周辺の開発によって損なわれていったことが伺われる。

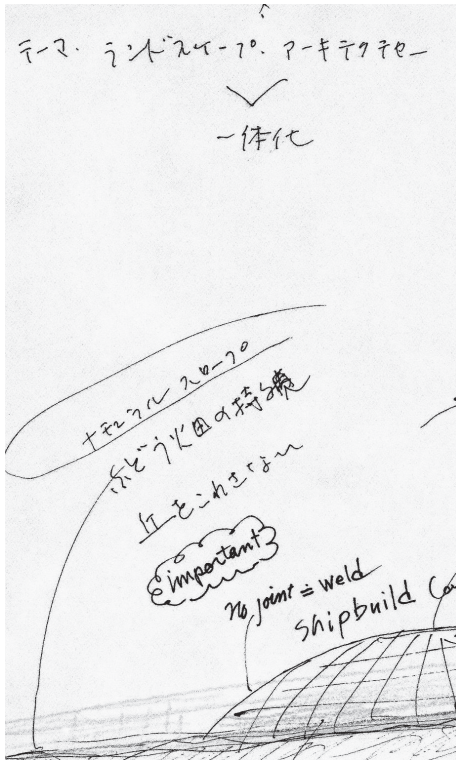


図15 図14左上、書き込みの拡大

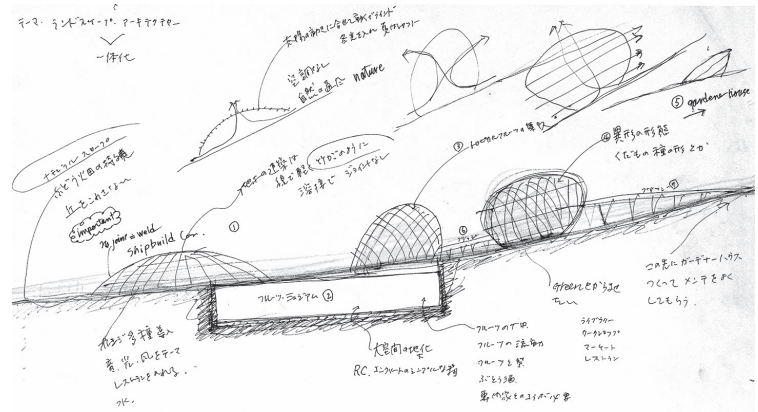


図14 長谷川逸子 山梨フルーツミュージアム ドローイング 1992年

ランドスケープ・アーキテクチャーとは、歴史的にはアメリカで提唱された、拡張された庭園の概念を指す。最初にランドスケープ・アーキテクトを自称したのは、ニューヨークのセントラル・パークやボストンのエメラルド・ネックレスを設計したフレデリック・ロウ・オルムステッド (Frederick Law Olmsted 1822-1903) だという。ヨーロッパの庭園は、イタリアに発祥しフランスで栄えた幾何学的平面をもつ整形式庭園を規範としていたが、イギリスでは整形式庭園は専制政治と結びつけて批判されるようになった。その後、農業や植林などの社会活動とつながりを持ち、自然さによって感情に訴えるイギリス風景式庭園が隆盛していく。オルムステッドは、1850年にジョセフ・パクストンによるイングランドのバーケンヘッドの公園を訪れた。奴隷解放運動にジャーナリストとして参加していた彼は公園に、人々の感受性を養い、多様な人間が共同体の成員となる理想を求めた。オルムステッドがランドスケープ・アーキテクチャーの創始者とされるのは、多難な政治的交渉によって数多くの公共空間の創出を実現し、建築家や園芸家から独立した職能を確立したためである³⁰。しかしそのデザインは、イギリスの風景式庭園に多くを負っていた。社会的な問題解決と美的なデザインの問題に取り組んだ後継者たちは、ボザールの教育のなかでの整形式か風景式かの選択に代わってランドスケープ・アーキテクチャーの語を用い、次第にモダニズム建築の思想を共有するようになる。

イギリスの庭園美学の変遷を詳細に吟味した安西信一は、現代の大規模な造園としてのランドスケープ・アーキテクチャーを、社会や自然との対話を欠いた私的な閉域として批判していた。この批判は、イギリスの庭園自体が18世紀後半以降、公共性との緊張関係を失い、観者の個人的体験へと縮減されてきたという議論を前提としている³¹。確かに、アメリカのランドスケープ・アーキテクチャーは戦後の経済発展に伴い、社会問題の解決よりも豊かで快適な空間の創出に向かった³²。周囲の自然との調和や洗練された形態の操作が、社交や健康、リフレッシュのために用いられた。しかし現代のランドスケープ・アーキテクチャーの多くは、住民の参加や生態系との関係、都市問題などの社会的課題に取り組んでいる。

笛吹川フルーツ公園を見てみると、造成された丘陵の斜面にテラスとスロープを配してミュージアムの建物を繋ぎ、野外劇場を置き (図16)、バインカスケードが噴水からグロッタ風の岩屋とアクアスレチックの遊具に流れ降りる水の流れを強調している。(図17, 18, 19) ここに見られる象徴性を失った歴史的モチーフを、ポストモダンの引用として批判的に評価することもできるだろう。し

かし、入口広場のテラスやスロープ途中の富士見台からは、笛吹川の流れる甲府盆地を挟んで正面に富士山、東に大菩薩嶺、西に雪をいただく南アルプスの山々までを望むことができ、笛吹川が作ったフルーツを育くむ扇状地の成り立ちを、感じとることができる。



図 16 フルーツシアター、2021 年撮影



図 17 バインカスケード、2021 年撮影（冬季は水がない）



図 18 池、2021 年撮影



図 19 アクアアスレチック、2021 年撮影

フルーツミュージアムの初期ドローイングに「ランドスケープ・アーキテクチャー」と書き込んでいた長谷川逸子は、後年、次のように述べている。

伝統的住宅は、どこに行ってもアプローチ空間や家の周りに花いっぱいの庭園をつくっていることが多い。東北の寒いところも、雪の多い日本海の方でも、沖縄の暖かいところでも。春訪れた富山では、私の東京の家と同じチューリップなのに赤が違う。ものすごく美しい赤色で、なぜか調べたくて聞き歩くと、黒部溪谷の栄養豊富な水が地下水となって流れているからだろうという答えが一番多かった。日本列島の中心に山脈の走る日本の各地は、山々の水の恵みを生けて花の色も野菜の味もつくっている。とにかく日本の家は庭と切り離せないものとなっていた。東京の下町の密集地でも家の前に鉢をならべて花づくりをしている家が多い。日本人は単に花が好きというより、花づくりを通して美しい自然に触れているように私には見えた。（中略）公共建築の敷地は広く、だいたいランドスケープを同時にデザインすることになる。私が建築とランドスケープを一体とした「ランドスケープ・アーキテクチャー」という考えで設計を進めることになったのも、こうした民家的な発想から来ているように思う³³。

ここで言われる「ランドスケープ・アーキテクチャー」には、広大な敷地を建築家のデザインの対

象として切り取る態度とは反対に、野菜や果物の味や庭の花もその土地の土壌や水系、気候と繋がっているというビジョンがある。しかし初めに述べたように、笛吹川フルーツ公園の設計はミュージアムに先行して行われ、長谷川が担当したのはミュージアムの建築であった。長谷川の「ランドスケープ・アーキテクチャー」はむしろ、フルーツ公園と同時期に計画された新潟市民芸術文化会館に実現している。さらにフルーツミュージアムの完成後、民活整備区域にホテルや温泉などの建物が付加され、ブドウ畑に浮かぶ新しい集落というイメージは失われていった。フルーツ公園の印象について、山梨大学で園芸科学を研究する矢野美紀は以下のように回答した。

まず公園に入って最初に感じたことは、コンクリートが非常に多く、植物が少ないということです。(中略) コンクリートで覆われた土地では、地上地下間の空気の入りが遮断されるため、土中の酸素が欠乏したり水はけが悪くなるなどして植物の生育が広範囲に渡って衰えていくことや、さらには斜面崩壊や洪水などの災害も起こりやすくなるのが指摘されています。ですので、環境保全の観点からも、コンクリートが多いことは好ましくないと思います。(中略) ここが緑の多い自然に近い環境ならば、その場に足を踏み入れた時から、自由な気持ちで楽しめるのに、と思いました。体を動かして遊ぶだけでなく、四季折々の風景などを鑑賞したり、自然の動きや表情を学んだり、多様な楽しみ方が可能になるのではないかと思います³⁴。

戦後アメリカのランドスケープ・アーキテクチャーは庭園の概念を拡張したが、自然を馴致して快適な空間を生み出す方法となっていた。しかし現在では、大規模な開発自体がより慎重な検討を要するようになってきている。訪れた人に深い印象を残すフルーツ公園の風景を、快適な空間としてだけでなく、大きな循環の一部としての新しい「ランドスケープ・アーキテクチャー」の視点から、見直すことができないだろうか。

3. 結びにかえて テーマパークとその外部

本稿では、笛吹川フルーツ公園とフルーツミュージアムが成立時にもっていた構想を確認し、1995年の開園以降の変化のうち、トロピカル温室の廃止と民活整備区域の開発を指摘した。そして、植物園およびランドスケープ・アーキテクチャーの概念の検討を通じて、変化によって忘れられた理念の意義を明らかにしようとした。最後に、笛吹川フルーツ公園が「フルーツをテーマとしたテーマパーク」として構想されたことを想起し、テーマパークについて付言して結びとしたい。

アーティストのダン・グレームは、従来庭園があわせ持っていた劇場やミュージアムの機能が、さまざまな形態に変わっていったことを論じるなかで、テーマパークについても言及している³⁵。

第二次世界大戦後、アメリカの生活は自動車化し、郊外住宅、ドライブイン・シアター、ショッピング・モールが興隆した。街なかの映画館は衰退し、高速道路沿いにテーマパークが生まれた。ディズニーランドがその最もよく知られた例である。グレームによると、テーマパークは19世紀の万国博覧会と同じように資本主義のイデオロギーの見世物になった。彼はレイ・マランの「退廃のユートピア—ディズニーランド³⁶」を引用しながら次のようにいう。ディズニーランドは、観客が俳優として演じる物語である。この物語は、初期アメリカのシェーカー教徒やモルモン教徒のようなユートピア的計画を反転させる。ショッピングが並ぶメイン・ストリートUSAは、現在のアメリカそのものを表している。それは訪問者に対して、人生は終わりのない交換と恒常的な消費であることを示しているのである。また、自然の表象は次のようなものである。

大きな看板の地図の左側にあるのは、アドベンチャーランドとフロンティアランドだ。異国情

緒あふれる国々の野生動物でいっぱいのアドベンチャーランドは、熱帯雨林を流れる川をボートで下りながら見るができる。アドベンチャーランドは、アメリカがすでに征服した世界の外にある野性との関係によって、アメリカを定義づける。反対にフロンティアランドは、アメリカがその内部にある野性を制圧したことを示している。どちらも過去についての帝国主義的神話である³⁷。

ここでは、テーマパークはその世界観によって生産から切り離された消費の場であり、自然も機械仕掛けである。一方フルーツ公園は、くだものを楽しみながら、その生産とも結びつく場のはずである。山梨市でワイナリーを営む鈴木順子は、筆者の質問に以下のように回答している。

果樹栽培やワイン等の文化を、フィールドワークを通して新たな視点でアートとして表現する事が可能だろうし、レジデンスとして公園内に滞在する事も出来るのではないかと。また環境というテーマが当初からあったのであれば、公園運営においてSDGsに適った取り組みを積極的に行い発表する事で全国の公共施設の模範となつてほしい。農業においても環境適合は喫緊の課題なので、そういったセミナーやワークショップの会場としても利用したら良いと思うが、何をやるにしても大きな問題は殆どマイカーでしか行けないという事。万人に開かれた場所になっていないし環境にも良くないので、週末やイベントに合わせてバスを増便させるなど、行政が本腰を入れないと時代に即した展開は難しいと思われる³⁸。

環境の問題や、種苗をめぐる権益や格差なども含む食糧問題は、地域の日常が地球規模の問題と繋がっていることをあらためて示している。農業にとって環境問題は切実だが、消費者も資源の消費が自然環境の圧迫を伴うことを知らなければならない。「フルーツをテーマとしたテーマパーク」においては、自然は幻影ではなく、土地や生産と繋がる回路をもっている。長谷川がフルーツミュージアムの建築理念において、フルーツの伝播、フルーツをめぐる生活文化のあり方には「地域性と国際性が見事な共存」があると述べていたことが思い起こされる。公共性が時代と共に変化していくのは当然である。しかし、植物園のグローバル性とランドスケープの地域性を往還する笛吹川フルーツ公園成立時の構想は、現代に即して組み直していくことのできる可能性を有している。

【註】

- 1 山梨県『県単都市公園建設設計委託 笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム 展示運営基本計画 報告書 平成3年3月』1991年、18頁。
- 2 「フルーツミュージアム計画懇談会」、山梨県・(株) 森緑地設計事務所『県単都市公園建設設計委託 笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム基本設計報告書 第3篇 資料編 平成4年3月』5-132-5-138頁。但し、同懇談会は平成4年5月15日に開催されており、実際に報告書がまとめられたのは1992年10月の可能性が高い。
- 3 須之部淑男 (NHK 教育局科学産業部) 「市民・国民・人類的課題としての環境教育」『日本教育学会大会研究発表要項』31号 (1972年)、236頁。公害・環境問題は生活に迫る火急の問題であるにもかかわらず、地球規模の問題で解決が難しい。現在の生産・生活の様式の変更が求められるが、新しい価値体系を上から強制することはできないとして、自らの生存と結びついた環境教育の必要を説き、環境教育の基本項目を挙げている。
- 4 長谷川逸子・今野裕一・畑祥雄「未来に建築を開いていく『山梨フルーツ・ミュージアム』を巡って」『新建築』第70巻4号 (1995年4月号)、252頁。
- 5 長谷川逸子・建築計画工房 (株) 「Ⅲ 各施設の計画意図 1 くだもの広場」『山梨県笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム建設工事設計主旨説明書』発行年、頁数なし。

- 6 長谷川逸子・建築計画工房(株)「Ⅲ 各施設の計画意図 2くだもの百科」前掲書。
- 7 長谷川逸子・建築計画工房(株)「Ⅲ 各施設の計画意図 3くだもの工房」前掲書。
- 8 建築思潮研究所編『建築設計資料44 植物園・温室・緑化施設』建築資料研究社、1993年。
- 9 長谷川逸子・建築計画工房(株)「Ⅰ 設計概念」前掲書。
- 10 「ゆるキャン△×山梨日日新聞 原作者あろさん 山梨への思い語る」『山梨日日新聞』2018年7月9日5頁。
- 11 筆者は笛吹川フルーツ公園を利用者の観点から考える目的で、2021年12月、雨宮千鶴(版画家・山梨市在住)、鈴木順子(旭洋酒・山梨市)、丸山博亮(丸山農園工作室、木工家具製作・山梨市出身)、矢野美紀(山梨大学生命環境学域・生命農学系、園芸科学)の4名に依頼して、以下の質問に回答してもらった。①笛吹川フルーツ公園での体験、②笛吹川フルーツ公園の建物(フルーツミュージアム)の印象、③笛吹川フルーツ公園に期待すること(資料1「笛吹川フルーツ公園と長谷川逸子の公共建築」資料2「くだもの館の展示内容」を踏まえて)。同時に山梨市内の児童・生徒への調査も行ったが、その結果については別稿で論じたい。また、都市からの来訪者に対する調査は実現できなかった。
- 12 川島昭夫『植物園の世紀 イギリス帝国の植物政策』共和国、2020年、15頁。
- 13 桑木野幸司「(第7章)コレクション空間としての庭園 —「庭の掟」と植物園の世界」『ルネサンス庭園の精神史 権力と知と美のメディア空間』白水社、2019年、222-239頁。
- 14 前掲書、237頁。
- 15 川島昭夫『植物と市民の文化』山川出版社、1999, 2009年。
- 16 松宮秀治『ミュージアムの思想』白水社、2003年。
- 17 岩槻邦男『日本の植物園』東京大学出版会、2004年、26-68頁。
- 18 註2「フルーツミュージアム計画懇談会」発言概要より。委員は天野秀二(新宿タカノ社長室長)、千野知長(日本種苗協会顧問・山梨果樹試験場長)、中村桂子(早稲田大学人間科学部教授・生命誌研究館副館長)、長山節子(NHK生涯学習プロダクション・チーフディレクター)、湯浅浩史(財団法人進化生物研究所研究員・育種学、植物地理学、栽培植物文化史)、山口昭(日本種苗協会理事・元農林水産省果樹試験場長)。肩書は当時。
- 19 註11の調査への回答。
- 20 「博物館、美術館を外部評価 県事業仕分け 対象37事業選ぶ」『山梨日日新聞』2010年5月18日20頁。肩書は当時。
- 21 「山梨版仕分け終了 4事業の『廃止』指摘 県、来月中旬に2次評価」『山梨日日新聞』2010年9月14日20頁。小池一男県土整備部長は「利用者数が減っていることは事実で、対策は取らなければならない」としながら、「利用者の中には静かできつろげる環境を求めるケースもある。集客ばかりに目を向けるのも考えもの」とコメントしている。「記者ノート『集客』だけで仕分けないで」『山梨日日新聞』2010年9月15日2頁。
- 22 「フルーツ公園『くだもの館』を廃止 県、仕分け踏まえ方針」『山梨日日新聞』2010年11月3日20頁。
- 23 長田和之「ドーム施設を無料開放 フルーツ公園 遊具や芝生広場整備」『山梨日日新聞』2013年3月31日20頁。
- 24 註11の調査への回答。
- 25 「高田・山梨市政の課題 上」『山梨日日新聞』1994年7月13日14頁。
- 26 「笛吹川フルーツ公園 センターあす開館」『山梨日日新聞』1996年4月12日21頁。
- 27 地方自治法の改正により、自治体が公の施設の管理者に民間事業者を含む法人等を指定し、管理運営にあたらせることができるようになった。2003年施行。
- 28 田中勝・金川久子「山梨フルーツ・ミュージアム」『新・田園居住のデザイン』1998年度日本建築学会(九州)農村計画部門研究協議会、1998年、70頁。
- 29 長谷川逸子・(聞き手)古谷誠章「対談 続いてきたものから新しい考えをつくる。」『十二組十三人の建築家 古谷誠章対談集』138頁。
- 30 ピーター・ウォーカー、メラニー・サイモ『見えない庭 アメリカン・ランドスケープのモダニズムを求めて』(佐々木葉二・宮城俊作訳)鹿島出版会、1997年、11-27頁。(Peter Walker and Melanie Simo, *Invisible Gardens: The Search for Modernism in the American Landscape*, Massachusetts Institute of Technology, 1994.) オルムステッドについては以下も参照。Witold Rybczynski, *A*

Clearing in the Distance: Frederick Law Olmsted and America in the 19th Century, New York: Simon and Schuster, 1999,2003.

- 31 安西信一『イギリス風景式庭園の美学〈開かれた庭〉のパラドックス』東京大学出版会、2020年〔増補新装版〕、243頁。
- 32 ウォーカー、サイモ、前掲書、84頁。
- 33 長谷川逸子「建築設計の原点」、長谷川逸子『長谷川逸子の思考 2』左右社、2019年、18-19頁。初出：2016年書き下ろし。「伝統的住宅建築は私の設計の原点」MIEJSCE SPOTKANIA（ポーランド、2018年）。
- 34 註11の調査への回答。
- 35 Dan Graham, “Garden as Theater as Museum,” in: Brian Wallis(ed.), *Rock My Religion: Writings and Art Projects 1963-1990*, The MIT Press, 1993, pp.286-307. First published in Chris Dercon (ed.), *Theatergarden bestiarius: The Garden as Theater as Museum*, The MIT Press, 1990, pp.86-105. グレアム自身の作品と庭園の歴史の結びつきについては以下で論じた。拙論「ダン・グレアムのパヴィリオンと歴史の編纂：《キューブのなかにあるハーフミラーの円筒とビデオ・サロン》について」『山梨大学教育学部紀要』第32号（2021年度）、215-226頁。
- 36 ルイ・マラン「(第12章) 退廃のユートピア—ディズニールランド」『ユートピア的なもの 空間の遊戯』（梶野吉郎訳）法政大学出版局、1995年、332-362頁。（Louis Marin, *Utopiques: jeux d'espaces, collection «critique»*, Les Éditions de Minuit, Paris, 1973.）
- 37 Dan Graham, *op.cit.*, p.298.
- 38 註11の調査への回答。

図版出典：

- 図1 山梨県『(仮称) 笛吹川フルーツ公園基本設計報告書 平成2年3月』1990年、95頁。
- 図2 山梨県『県単都市公園建設設計委託 笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム 展示運営基本計画 報告書 平成3年3月』1991年、19頁。
- 図3 「くだもの村鳥瞰図」、前掲書、頁数なし。
- 図4 『SD スペースデザイン』第374号（1995年11月号）、17頁。（部分）
- 図5 長谷川逸子『長谷川逸子 ITSUKO HASEGAWA Section 1』鹿島出版会、2015年、119頁。（部分）
- 図6 『SD スペースデザイン』第374号（1995年11月号）、21頁。
- 図7 長谷川逸子・建築計画工房（株）「くだもの百科他 断面図」、『山梨県笛吹川フルーツ公園フルーツミュージアム建設工事設計主旨説明書』発行年・頁数なし。
- 図8 長谷川逸子・建築計画工房（株）「くだもの工房 立面図」、前掲書、頁数なし。（部分）
- 図9 長谷川逸子『長谷川逸子 ITSUKO HASEGAWA Section 1』130頁。（部分）
- 図10 長谷川逸子『海と自然と建築と』彰国社、2012年、10頁。（部分）
- 図11 長谷川逸子・建築計画工房（株）「全体配置図」、前掲書。（部分）
- 図12 長谷川逸子『長谷川逸子 ITSUKO HASEGAWA Section 1』117頁。（部分）
- 図13 長谷川逸子『長谷川逸子 ITSUKO HASEGAWA Section 1』122頁。（部分）
- 図14 長谷川逸子『海と自然と建築と』13頁。（部分）
- 図15 長谷川逸子『海と自然と建築と』13頁。（部分）
- 図16-19 筆者撮影

謝辞：本稿は、公益財団法人大林財団の研究助成（2021年度）による研究の成果の一部である。山梨県笛吹川フルーツ公園、山梨県県土整備部、長谷川逸子・建築計画工房、調査に回答して下さった皆様をはじめ、関係各所にも深く御礼申し上げます。